

クシオンシンチグラフィ (TTS) は他の画像診断より有効とされている。異所性のうち胸腺内 1 例、縦隔内 3 例の副甲状腺腫大について検討したところ、縦隔内で TTS でのみ診断がつき 4 度目の手術でようやく切除に至った 1 例を経験した。Sensitivity は 75% であった。異所性副甲状腺の局在診断に対し TTS は有用であった。

18. 肝細胞癌の TAE 施行時における ^{99m}Tc -GSA アシロシンチの有用性

鎌田紀美男 (函館医師会病院・放)
西 直子 木村 環 樽沢 孝二
淀野 啓 竹川 鉦一 (弘前大・放)

肝細胞癌 23 例に対して、TAE 施行前の肝予備能評価として ^{99m}Tc -GSA scan を施行したところ、conventional labo. data である総ビリルビン、PT とはあまりよい相関が得られなかったが、albumin, ChE, HPT, ICG $R_{\max}$ とは比較的良好な相関を示し、肝予備能の総合評価の一翼を担うものとして今後期待された。

また、9 例に対して TAE 施行前と TAE 後 3~4 日にて ^{99m}Tc -GSA scan を施行したところ、HH15 の値は有意の改善を示し、LHL15 の値は改善の傾向を示した。この原因として、腫瘍血管塞栓による相対的な正常肝細胞への血流回復、肝動脈閉塞による代償性の門脈血流の増加等が考えられた。

19. ^{99m}Tc -GSA の体内動態の食事による影響

加藤千恵次 鐘ヶ江香久子 永尾 一彦
中駄 邦博 藤森 研司 伊藤 和夫
古館 正從 (北大・核)

16 例の正常肝において空腹時、食事負荷後の GSA の肝集積曲線をモノコンパートメント解析し、肝集積量 Co 、集積初速度 Do 、摂取係数 Ku を算出し比較検討した。肝集積量 Co は体表面積と相関を認め ($p < 0.001$, $r = -0.77$)、補正式を導き補正值 Co' , Do' を算出した。 Co' は食事負荷による有意な変化を示さない。GSA の肝集積量は肝細胞数で決まるためと考える。 Do' , Ku は食事負荷によって 13% の有意な増加 ($p < 0.001$) を示し、HH15, LHL15 と比べ肝血流の変化によって大きく変化し、肝への GSA 摂取の動態をよりの確に示す指標であると考えられる。今後検討すべき課題は、疾患例では食事負荷による肝血流の変化で GSA の肝集積が正常例と比較しどのように変化し、肝予備能といかに関係するかを評価することである。

20. 肝移植後の肝胆道シンチグラフィ

山崎 哲郎 丸岡 伸 後藤 靖雄
坂本 澄彦 (東北大・放)

先天性胆道閉鎖症による肝硬変に対して肝移植が施行された患者 2 例に対して肝胆道シンチグラフィを経験した。1 例は生検で慢性拒絶反応の末期像を呈しており肝内胆管の消失と肝細胞の強い障害が認められ、シンチグラフィでは ^{99m}Tc -PMT の集積低下と排泄遅延を認めた。他の 1 例は生検所見は慢性拒絶反応で、グリソン鞘への炎症細胞の浸潤と肝内胆管への多形核白血球浸潤がみられ、シンチグラフィでは ^{99m}Tc -PMT の集積は良好であったが、排泄の遅延を呈した。

肝胆道シンチグラフィ所見は組織学的変化が機能面にもたらす変化をよく反映しているものと思われ、本検査は移植後の肝機能の把握や予後の推定に有用な情報を提供しうる検査と考えられた。